

伝統芸を若い世代に～職人たちのまちおこし

室蘭手わざ（室蘭市）

低学年の小学生たちが、夢中になって凧づくりに挑戦している。高学年の5年生たちはやや高度な真鍮の葉、6年生は鋳物の鈴づくり。「うまく出来たよ」「うーん、ちょっといびつ」。子どもたちの歓声が、校舎に響く。

教えているのは教師ではない。室蘭のマチの伝統芸職人たち。子どもたちにとって親の世代であり、あるいはおじいちゃんの世代でもある。

■ 地域に根付く伝統芸

「地域に根付く職人たちの伝統の技（わざ）を若い世代に、多くの人たちに知ってもらい、伝えていきたい」と「室蘭手わざ」（大澤幸一郎代表）が取り組んできた。

メンバーは表具師の大澤さんをはじめ、三弦、染織、和菓子、木炭、刀匠、塗師、紋章、大工、鋳物、凧絵の正会員の職人たち11業種11人。一業種一人の異業種交流集団だ。

結成は1990年。その数年前から3、40年代の大澤さんら中堅職人たちが「職人が手間ひまかけ、丹精こめてつくりあげてい

く過程を、肌で感じてもらいたい。若い世代に伝えていきたい。生きていく上で、何かを感じてもらえれば」と語り合っ、ようやく実現したのだった。

運営にかかる費用は、わずかな年会費や展示会などでの販売収入の1割を出し合い、何とかまかなってきた。

鉄のマチとして知られる室蘭だが、松前藩がこの地にアイヌ民族との交易の「場所」を開いて以来の長い歴史を刻んできただけに、伝統芸がしっかりと根付き、生きている。

リーダー役の大澤さんは、表具師3代目。東京の美大で学んだユニークな職人だ。全国表具経師組合連合会会長賞を2度も受賞、文化庁などから文化財の保存修復を依頼されるなど、極め付きの腕の持ち主。

「文化財を修復していると、何百年も昔の職人の署名が記されているのを発見します。最後の修復職人として、私の名前も記す。永遠に残るんです」。

伝統職人としての誇りがある。2003年に「卓越した技能者」として、道知事から「産業貢献賞」を受賞している。



お母さんたちが学ぶ表具づくり

■ モノづくりから人づくりへ

会員が得意の作品を持ち寄って展示する、毎年恒例の「手わざ展」は、結成翌年にはじめられ、2010年で実に20回に及んだ。

毎回、3千人前後の市民参加があり、延べ参加人数は6万人をはるかに超える人気ぶりだった。

メンバーが資金を負担、手弁当で働いた。1人年間、6千円。他に即売会のわずかな売り上げ収入がある。次第に行政や道文化財団などの補助も得るようになり、長続きするイベントになった。

節目の20回記念展は同年5月、室蘭市海岸町の旧「プロヴィデンス・ブルアリー」で、6日間にわたって開催された。

会場には掛け軸、紋章、刀、凧絵、和菓子、鋳物、染め織、魚拓、陶芸、木工品、鉄アート、籐工芸、押し花、衣装、切り絵など、正会員と、賛助会員などの職人たち

合計63人の作品が並んだ。

実物の7分の1という木製の蒸気機関車や水引でつくった鎧甲（よろいかぶと）などが、人気を集めた。

会場の一角には、小学生の作品も展示された。室蘭手わざの職人さんたちによる体験学習で指導を受け、つくった作品の数々だった。

「物づくり体験」の場も設けた。和だこづくり魚拓づくり、市章入りコースター、絵手紙額、絵手紙軸、和菓子、宝金しおり、木のおもちゃづくりに、親子連れが取り組んだ。



さあ、何をつくろう

■ 広まる共感の輪

単に後継者育成というのではなく、人づくり、マチづくりを、という職人たちの熱い思いが、長い歳月を経て、市民の間に浸透し、広まってきた。後継者らも新たに、賛助会員として加入、いまでは 20 人になった。さらに特別会員がいる。

20 回目の「手わざ展」では「落語長屋」「仙助流南京玉すだれ」「音楽と詩と映像のコラボ・風のささやき」なども催された。市民の輪が大きく広がっている。

2002 年には道から「北のまちづくり賞奨励賞」を受けた。



職人さん（左）の手先に、子どもたちが真剣な眼差し

■ 道職人義塾大学校と連携

「室蘭手わざ」メンバーはいま、開催 20 年に及んだイベント「手わざ展」をいったん休止、角度を変えた展開をめざしている。主なイベント会場としてきた旧丸井室蘭店が閉鎖された事情ばかりでなく、会員の高齢化も考慮して、次世代への伝承に力を入れる。

近い将来、まず室蘭手わざを有志の任意団体から NPO（非営利団体）法人の資格を取って、組織の基盤を固めたい。

定着してきたメンバー店舗ごとの「ものづくり体験学習」を、いっそう活発化させたい。小学校での出前指導など、子ども向けの「手わざ教室」をさらに広めていきたい。一と大澤代表は考えている。

この事業は、NPO 北海道職人義塾大学校（小樽）と連携・協力している。室蘭手わざが加盟する同大学は小樽を拠点に、次世代の職人養成をめざし「ものづくり体験」を展開している。

会員と賛同者の協力を得て、凧(たこ)づくりから家紋・布コースター、銀粘土のアクセサリー、木工のマイ箸(はし)、鋳造メダル、魚拓、木製おもちゃ、絵手紙用額づくりなど多様なコースを用意した。

場所は旧 JR 室蘭駅舎をはじめ、道の駅やフェリーターミナルなども考えている。

時間は 90 分ほどで、参加者からは千数百

円程度の料金設定をした。実費プラス講師に対する謝金で、講師役の職人さんの励みにもしたい。

その第1回の試みとして、2010年6月には札幌の小学生60人を迎え、体験授業をした。職人たちの指導で凧(たこ)づくりや魚拓づくりに挑戦して、子どもたちは「素晴らしい作品ができた。記念になる」と喜びだった。

向こう3年以内に小、中学生を中心に年間500人の受け入れ拡大をめざす。

室蘭には地球岬などの景勝地があり、新日本製鐵、日本製鋼所などの工場見学も盛んだ。近郊の登別、洞爺湖温泉と、立地条件に恵まれている。

それだけに、小、中学生の往来が「呼び水」になって、道内外から修学旅行や海外の観光客なども呼び込んでいきたい、とマチの人たちが寄せる期待も大きい。

「ものづくり体験学習」のパンフレットもつくった。A4判、カラー4ページに、体験メニュー、受け入れ人数、概要などを記載した。

大澤代表は2010年秋、JR室蘭駅に近い商店街の一角に空き店舗を改装して「手わざの店『北のわざ灯(あかり)』」を新設オープンした。

空き店舗は大澤代表の個人所有で、木造2階建て。1階に会員らの作品約300点を

展示、即売する。二階が来訪者にもものづくりの体験をしてもらう「次世代にもものづくりを伝える場」。同時に「市民との交流の場」をめざして、室蘭市が趣旨に賛同して、200万円の補助をしている。



■ 連絡先：室蘭手わざ

〒051-0011 室蘭市中央町2丁目8-4

(有) 大澤室内工芸

TEL:0143-22-4844 / FAX :0143-22-4840